



2019年の年明けから早くも大寒の時期となり、寒い毎日ですが、皆様お元気でございましょうか。伊都さんも帰国から数年が経ち、日本での交流が広がった成果でしょうか、コンサートに来られるお客様の顔ぶれにも変化が見られるようになりました。年齢層の幅が広がり、クラシックは初めて…という方もおられます。変わらず応援して下さる皆様と、そして新たに興味を持って下さる方々にも、伊都さんは今年も音楽の感動や安らぎ、喜びを伝え続けてくれることでしょう。本年もTRAUBENをどうぞよろしくお願い致します。

## 近況報告



16回目のリサイタルが無事に終わられましたこと、皆様の応援に心より感謝申し上げます。お礼状にも書いたとおり、新しい世紀が始まってまもない2003年に始まり平成最後の昨年2018年まで16年間、毎年年の瀬に、生まれ育った横浜の地、慣れ親しんだ海を臨む、みなとみらいホールの舞台に立てていることの幸せをかみしめています。



時代はタッチ世代（タッチパネル操作、指先一つですべてができる）からボイス世代だそうで、若い友人がリハーサルに楽器とタブレット一つ、画面に曲目を一声かけると、楽譜が白い壁に映し出され、小さなボタンを足で踏んで譜めくりもなんのその、今後は3Dで楽譜が目の前に浮き上がってくるようになるのだとか、コメント、注意事項も箇所を指して話すだけでOK（書き込み完了）、音符が読めないほどの書き込みで真っ黒な楽譜は、過去の遺物となり、手作業の時代は終わりを告げる様相ですが、なんの、ヴァイオリン演奏は究極の手作業ではないか！希少価値が進むに違いない！そして会場に足を運び、長い時間座って演奏を聴くという手間のかかることに、新たな存在意義が出てくるのではないかと信じ、今年も演奏を続けていきたいと思っています。

【伊都】

## 第16回 加納伊都ヴァイオリンリサイタル



12月20日、前週の寒さも和らいだ穏やかな夜、イルミネーションに囲まれた、みなとみらいホールでコンサートは開演しました。ピアニストはロンドン在住の松尾久美さんです。今年のリサイタルの選曲について、以下、青字は伊都さんのコメントです。



2018年が没後100年という記念の年だったドビュッシーのヴァイオリン・ソナタに再トライするぞ！ということは前年から決めていました。また、2017年に引き続き、最近凝っているシマノフスキーを入れること。あと、16回目とまた新たなスタートを切るということで、何だかんだと好きなブラームスのソナタで、高校時代、初めて同級生のピアノと一緒にコンサートで弾いた、大人な曲第1号で、一生懸命取り組んだ思い出の曲であるソナタ第2番。そして、自分で思っているより皆から得意だと思われる難曲チャイコフスキーのワルツ・スケルツォをプログラミングしました。

20世紀前半のポーランドの作曲家シマノフスキーの曲は、神秘的で不思議な曲調。叙情的な表現が優れている伊都さんには、「凝っている」との通り、とてもよく似合っています。最後の曲、ワルツ・スケルツォはチャイコフスキーらしい華麗な曲。高度な技術が要求される難曲ながら、サラリと軽やかに華やかに弾く伊都さん、お見事でした。



伊都さんの文章によるプログラムノートには、それぞれの曲の解説と、曲にまつわる留学時代のエピソードが、老眼には厳しい細かい字でびっしりと綴られていて、毎年大切に保存して下さる方も多いようです。今後、ホームページにも掲載していく予定ですので、コンサートに来られなかった方にもお楽しみ頂けると幸いです。

アンコールは、伊都さんには珍しい？クリスマスメドレー！「きよしこの夜」や「あめにはさかえ」「もろびとこぞりて」などなど、お馴染みの曲の数々に、会場は一気にクリスマスモードに華やぎました。鳴り止まぬ拍手に再度のアンコールは、皆さんの期待を裏切らないチャールダッシュ！スローテンポと超高速が織りなす、世界でたった一つの演奏でした。

## オータムコンサート ～ヨーロッパの香り～



深まる秋の風が肌寒く感じる昨年 11 月 3 日、横浜山手ベリックホールでオータムコンサートが開催されました。

クライスラー「美しきロスマリン」に始まり、モーツァルト、パガニーニ、シュトラウス、バルトーク…楽しい小品とトークが続きます。中でもドビュッシー「月の光」は秋の夜に聴きたい曲 No.1 かもしれない程、うっとりとお聴かせてくれました。ピアニストは桐朋の後輩、三又瑛子さん。初コラボながら堂々の演奏でした。

休憩時間に提供された軽食は、元町・フランス菓子料理教室「Eiko Morita」さんのお料理。まるで、すべてがお洒落なお菓子のよう。トレーに盛り付けられた前菜や、スープ、サンドイッチにデザート。お味もどれも美味しく、感激しました。

後半は、ジプシー、アイリッシュ、タンゴ…西洋館の雰囲気と相まって、満席のお客様が酔いしれた秋の夜長でした。

## DVD Classic Collection

作品 No.35

## 「プラハのモーツァルト 誘惑の mascarade」

2017 年 イギリス・チェコ合作



## あらすじ

1878 年、プラハの名士たちはオペラ「フィガロの結婚」で大人気のモーツァルトを招き、新作オペラの作曲を依頼する。「フィガロの結婚」の公演で代役に抜擢されたスザンナと出会った彼は、その美貌と才能に魅了され、オペラ作曲を手伝ってもらう。一方オペラ劇場のパトロンで女性好きのサロカ男爵もスザンナを狙い、親に結婚を申し入れ、親は承諾してしまう。

## 見どころ

モーツァルト生誕 260 年記念映画。「アマデウス」以来のモーツァルト映画だが、奇想天外キャラとは大違い、イケメンの、恋する男として描かれる。オペラ「ドン・ジョバンニ」がプラハで初演された史実を元に、作曲の陰にはドン・ジョバンニを地で行く好色家の悪役の存在と、モーツァルトの純粋な恋愛があった…という物語。二つのオペラシーンが楽しめる。

## 感想

教科書でお馴染みの、あのモーツァルトとは似ても似つかない、かつていいモーツァルトが登場する。三角関係のもつれの末に…という内容を美しく飾ってくれるのは、まるで中世のままの街並みと建物の中で撮影されたプラハでのオールロケ、豪華な衣装、そしてプラハ市立フィルハーモニー管弦楽団と華麗なオペラの舞台。クラシック好きには楽しめる映画だと思う。

\*DVD は TSUTAYA の店舗でレンタル可能な作品のみをご紹介します

**編集後記** 先日ゴールデングローブ賞に輝いた話題の映画「ボヘミアン・ラプソディ」を観てきました。45 歳の若さで、エイズで亡くなった、ロックバンド「クイーン」のヴォーカル、フレディ・マーキュリーの半生を描いた映画です。両親はペルシャ系インド人、イギリスへの移民で、彼は両性愛者、当時は様々な偏見を持たれたマイノリティーでした。幼い頃からピアノを習い音楽の才能を開花させます。フレディは観客の心をつかみ、最後列の最後の一人まで彼と繋がっていると感じさせる人物。7 万人ものライブの観客と一体化するシーンは圧巻で、音楽の力を感じました。世代を超えて、移民の排除に敏感だったり、LGBT への理解が広がる現代の若者たちの共感、支持を得るのは納得！の映画でした。〈ゆ〉

発行：加納伊都後援会 TRAU BEN

〒231-0835 横浜市中区根岸加曾台 15

TEL：045-622-6780

FAX：045-621-6423

Email：trauben@itokanoh.com

Homepage：itokanoh.com